

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）  
 大学院生研究  
 2010年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学 研究科	日本文学 専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程 後期課程一年		条 汐里 印		
指導教員	所属・職名		氏名		
	立教大学文学部・教授		小峯 和明 印		
自然・人文・社会の別	自然	人文	社会	個人・共同の別	個人
研究課題名	説経『小栗判官』の研究―藤沢における受容と展開―				
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程 後期課程一年		条 汐里		
研究期間	2010年度				
研究経費	200千円				

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

物語はなぜ土地と結びつき、伝えられてゆくのか。中央に限定されてきた研究範囲を、地方まで押し広げ、人や物の交流の中で説経を捉えることが本研究の課題である。説経は、従来、近世初期に出版あるいは書写された正本が主体となり、成立から衰退までが議論されてきた。だが、三都以外に目を向ければ、寺社縁起や和讃、絵解きなどと融合し、民間に深く根を下ろしていることが確認できる。物語は享受する側と一体であり、読み手が物語のどこを主軸とするのか、作品媒体によって独自の取捨選択が行われている。このような現象について、神奈川県藤沢市に伝わる説経『小栗判官』の「絵解き」と「和讃」を研究対象とし、在地資料による説経研究の可能性を提起してみたい。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 小栗判官 ] [ 絵解き ] [ 和讃 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、藤沢市内に伝わる(1)絵解き(2)和讃の二つの資料を対象とした。まず、それぞれの資料が伝えられた背景について述べておこう。市内には『小栗判官』にまつわる遺跡や伝承が多く残されるが、特に西富の時宗総本山遊行寺小栗堂と、西俣野の西領山花應院の二か所に集中している。(1)の絵解きは、後者の花應院に伝えられたものである。

(2)の和讃は海岸沿いの地域・辻堂に住む石井三郎氏(辻堂茂兵衛資料館・館長)が伝えてきた資料群である。辻堂は、『小栗判官』の伝承や遺跡を有する地域ではないが、資料の中には『小栗判官』をはじめとする説経を題材とした和讃、地域の伝承を伝える和讃が確認される。以下、(1)絵解き(2)和讃の資料別に研究経過を報告する。

**(1) 絵解き**

絵解きは毎年一月と八月の十六日に、花應院で行われる。この寺院では①物語の十四場面を描いた掛幅『小栗判官縁起絵』一幅、②一場面だけを描いた『小栗判官一枚絵』、③通常より一幅多い十一幅からなる『地獄変相十王図』の、三作品を所蔵している。当日は経文が読み上げられた後、これらの絵画を住職や地域の人が指し示しながら説明するが、内容は日本古典文学大系『古浄瑠璃 説経集』で知られるあらすじに、花應院周辺の小栗判官伝承を加えた地域独自のものである。

従来の研究では絵解き行事がいつ、どのようにして西俣野地域にもたらされたのか、議論されてきた。形成に時衆僧の関与が認められると説く福田晃論、絵解きの行われる場所が祭祀儀礼の場であることに着目した徳田和夫論、村の教育の一環として捉えた小山一成論が代表的である。これらの論から二十年余りが経過したいま、改めて現地を訪れ、三点の絵画の調査を行った。その結果、絵の経緯を知る事ができ、地域の記録、文書等と合わせて、成立が大正期に絞られることを明らかにした。また、西俣野の小栗判官伝承については、明確な根拠のないまま、中世道場を構えた時衆僧が形成したと考えられてきた。この点について、かつて絵解きが行われていた閻魔堂の活動実態や地域の信仰から、地域住民の意識に注目し、伝承が近代に入ってから形成されたものである可能性を指摘した。これらの成果については、「『小栗判官』の絵解きをめぐって一俣野の信仰と伝承から一」(『立教大学日本文学』第104号、2010年7月)で詳細を報告した。

**(2) 和讃**

藤沢と『小栗判官』の関係を論じる際、主として冒頭で述べた伝承地の二大拠点—西富の小栗堂と西俣野の花應院—が俎上に載せられてきた。しかし、二つの地以外にも、『小栗判官』を伝える資料は残されている。今回、石井三郎館長の御好意で辻堂茂兵衛資料館の文書を調査する機会に恵まれ、地元ゆかりの物語が、和讃を通して人々に浸透していたことがわかった。

和讃とは、五七の連句で構成され、唱えられる歌謡で、仏法僧をたたえる儀礼的なものから、庶民の教化を目的とした娯楽に近いものまで、多岐にわたっている。早くから高野辰之、多屋頼俊、藤田徳太郎、中性哲の諸氏が和讃を文学史の中に位置づけようと試み、中でも高野氏は『日本歌謡集成』四(東京堂出版、1942年)に多数の和讃を紹介し、研究の基盤を整えた。だが、残念なことに紹介された和讃の書誌が記されておらず、資料の具体性につかめぬままになっている。この時点では、まだ和讃は歌謡としての意識が強く、詠(読)まれ、書かれ、継承されてゆくテキストとみなされていなかったのである。

その後、仏教歌謡(武石彰夫)、講(坂本要)、寺社縁起(久野俊彦)、歌謡(小野恭靖)など多方面の研究者が注目したが、資料に対する考え方は様々で、和讃をテキストとしてどう扱うべきか、模索段階であったといえよう。和讃に限らず、口承と書承の境界に位置する幸若舞曲、説経、古浄瑠璃などの語り物文芸が同様の問題を抱えている。本研究では文字と音声、双方向から分析することで、和讃が物語として享受された意義を明らかにしてみたい。

## 研究成果の概要 つづき

研究は第一段階において辻堂に伝わる和讃の目録、翻刻など資料の総体を整理した。第二段階では一作品を取り上げてテキスト分析を行い、和讃におさめられた物語がどのように人々に受け止められていたのか考察した。第二段階の詳細はすでに「辻堂茂兵衛資料館蔵『当麻中将姫和讃』一解題と翻刻一」（『立教大学大学院日本文学論叢』第10号、2010年8月）において発表している。ここでは第一段階である資料の全体像、問題の所在を中心に述べ、経過報告としたい。

辻堂に住む人々は漁業・農業をしつつ、大正・昭和年間には海軍演習場に隣接する地域として兵隊宿の経営も行っていった。東西南北の各町が接する辻「四ツ角」が地域の中心で、対角線上に宝珠寺と宝泉寺、二つの真言宗寺院がかつて存在していた（宝珠寺の方は江戸中期ごろの火災で焼け、現在の北よりの地に移転）。三郎氏によれば、西町の檀家の大半は宝珠寺で、その次に多いのが宝泉寺であるという。石井家はかつて宝珠寺の檀家総代を務めていたことのある家で、真言宗との関わりが深い。

所蔵される和讃帳は全部で55冊である。これらは、明治から大正期に生きた二人の女性一石井クニ氏（1832—1914）、石井タカ（本名サカ）氏（1862—1941）一の持ち物である。三郎氏が本家の仏壇下に保管してあったところを発見し、辻堂茂兵衛資料館の所蔵となった。

まず、和讃の伝来について述べておく。55冊の内、クニ氏のもの7冊、タカ氏のもの25冊、単に「石井」とだけあるもの1冊、名前のないもの12冊、他の人の名前が記されたもの7冊、他の人の名前とタカ氏の名が両方記されたもの3冊であり、タカ氏のもの約半数を占めている。他の人の名前と共に地域が記されているものがあり、折戸の西山金太郎氏（3冊）、鶴沼の斎藤のぶ氏（2冊）、六会円行の金子吉蔵氏（2冊）と、いずれも市内に住む人物から、石井家にもたらされたとわかる。

和讃の流通経路については不明な点が多い。だが、伝来を示すいくつかの手がかりを、表紙や奥書から確認することができる。そのうち3冊の和讃帳に見える「横浜野毛町大聖院」は、横浜市西区野毛町にあった高野山出張所、「日明山宝泉寺大聖院」のことである。大正十五年以前まで野毛にあったが、関東大震災で堂宇が焼け、現在の元久保町に移転となった。野毛時代の「大聖院」で念仏講が行われていたとの報告（『ものがたり西区の今昔』、1973年）や、石井家の和讃帳に「横浜野毛町大聖院／念仏講／大会／記念章」という印が押されていることから、この寺院を介して伝わった可能性が考えられる。

次に、和讃の内容について述べておく。和讃帳は数種類を合綴したものもあり、55冊が全体の冊数になるわけではない。外題では55冊であっても、内題や本文の内容から収録された和讃および御詠歌を数えると、全部で79編にも及ぶ。そのうち真言宗関連のものは15編、真言宗以外の経典や高僧を題材としたもの11編、順礼歌謡（すなわち御詠歌）が8編、物語を題材としたもの22編、時事を題材としたもの3編、『七福神和讃』『夢和讃』『嫁入り和讃』など年中行事・生活を題材とするもの18編、分類が困難なもの2編となっている。

内容が多岐に渡るものもあるため、分類はあくまでも目安であるが、物語や生活に根ざした和讃の多さが目を引く。また、クニ氏の6冊が教理や経典を説く内容であるのに対し、タカ氏のものには『葛の葉子別れ』『夢和讃』『お茶和讃』『青島陥落和讃』『震災和讃』など、祭文、チョンガレ、労働唄等の歌謡に通ずる和讃が多く収められている。これらは大正四年から昭和六年の間に集中して書写されており、この時期の和讃に対する認識の変化が伺われる。今後は近世・近代の歌謡と比較を行い、和讃が何を母体としているのか、加えて、和讃の持つ叙事詩としての働きについても検討してゆきたい。

【付記】調査の際、辻堂茂兵衛資料館・館長・石井三郎氏に格別なご配慮を賜りました。心より御礼申し上げます。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①
- ・ 条 汐里 「『小栗判官』の絵解きをめぐって—俣野の信仰と伝承から—」、『立教大学日本文学』第104号、2010年7月、15～33頁
  - ・ 条 汐里 「辻堂茂兵衛資料館蔵『当麻中将姫和讃』—解題と翻刻—」、『立教大学大学院日本文学論叢』第10号、2010年8月、108～122頁

- ④
- 条 汐里 「『小栗判官』の絵解き—俣野の信仰と伝承から—」立教大学日本文学会、2010年7月3日